
MADLOVE

ララ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M A D L O V E

【Nコード】

N 7 9 3 7 B

【作者名】

ララ

【あらすじ】

主人公桃井リク（モモ）は極々普通の男の子。ずっとスキだった幼馴染の森川鈴に告白して成功！だけど友達の諏訪戒が邪魔をしてくる。実は戒は…？三角関係有りで純愛です。同性愛含みます。

スキってこと

好きって気持は難しい。

だって何種類もあるから。

それは友達としての好きだったり恋愛対象としての好きだったり様々だ。

中でも厄介なのは恋愛対象としての好きだと思う。

気付いたらすきになって自分じゃ制御がきかないんだ。あらがえない。

その気持ちをもってたら想いを告げるまで苦しい思いをする。

告げても苦しい思いをすることもある。

もしそのすきって気持ちが溢れて溢れちゃったら人はどうなるのかな？

狂って狂って制御がきかなくなつて…

それからどうなるんだろう？

幸せになれるかな？

もし俺の気持ちですでに制御できなくなつててそれは狂ってるって
いわれても、俺は狂った愛を貫き通すんだ。

だって抜けないから。

まるで中毒だね。

おれの隣の家にすnder鈴ちゃんは強い。

小さいころから気の弱いおれを何かと助けてくれた。

それに比べておれ、桃井リクは情けないと思う。

背だってそんな高い方じゃないしスポーツしてるわけでもなければ勉強だってそんなでできる方じゃない。

でもおれは鈴ちゃんが好きで好きで仕方ないから告白しようって決心した。

おれが鈴ちゃんとつり合うとかそんなん全然考えてない。

でもこの想いを伝えないままいるのは苦しいんだ。

もう5年は我慢してる。

そろそろいわせて？

おれの気持ち。

だけでもう一人のおれがそれを邪魔する。

『やめときなよ。ふられるだけだって』

そういっておれの告白をふみとどませようとする。

これは別におれが二重人格とかいうわけじゃない。

だれにだってあるよね？

いわば心の葛藤ってやつ。

それを乗り越えた人だけが告白までいきつくんだ。

成功するかどうかは別として。

スキってこと

おれは無事そんな心の葛藤に勝つことができたみたいで、告白するって決心がついた。

ふられたらどうしようってそりゃ本当に思う。

でも言わなきゃ何もはじまらないから。

だからおれはふられたっていいから気持ちをつたえることにしたんだ。

作戦も考えた。

まず鈴ちゃんを学校かえりにつかまえる。

そんで一緒に帰る。

帰り道に告る。

返事はその場できく。

…でもふられたら泣いちゃいそう。

おれってへたれだもん。

それでも頑張るってきめたんだ。

それというのも鈴ちゃんは今同じクラスのやつと噂になってて…。

それきいて絶対とられたくないって思ったから。

鈴ちゃんは渡せないって。

今日はやけに一日が長かった。

ずっとどう告白するか…そればかり考えてた。

なんかひねるのも苦手だし、結局ただただ「好きだ」って伝えるしかないんだけどね。

最後の授業が終わるチャイムがなってからHRをしてる今が一番どきどきしてる。

おれもうすぐ鈴ちゃんに告るんだ。

もしふられたら今までみたいにはいられないかな？

でも鈴ちゃんは優しいから今までみたいに接してくれるんだと思う。

じゃあ、おれは？

おれは今までみたいに接することできる？

わかんない。

でもそうまでして伝えたいって思うことが現実にはあってそれは自分自身でもとめられないんだ。

心の中はやめときなって言ってるのに。

なんだろうね？

このときおれが鈴ちゃんに告んなきゃあんな未来はまっていなかったのかもしれない。

想像し得なかった未来。

アイツも気持ち抑えられなかったのかな？

でもおれはそれにこたえられなかった。

だからあんな態度とってきたの？

おれにはわかるようでわからない。

スキppingこと

靴箱の横でそわそわしながら鈴ちゃんを待つ。

靴箱で待ち伏せなんてしてる人そういないから結構目立つ。

なんだかそれが恥ずかしくてはずかしくて何度もおれの決心をゆるがせた。

なんとかもちこたえておよそ30分後。

ようやく鈴ちゃんがきた。

声をかけようとした

…が、

鈴ちゃんは5人くらいで歩いてる。

そう、友だちと…。

考えても見なかった。

今思えば当然のようなものでいつも友だちとかえってるのに今日だけ
は都合よくかえらないなんてありえないんだ。

おれの馬鹿…。

結局おれは楽しげに友だちと話しながら帰っていく鈴ちゃんをただただ目線で見送ることしかできなかった。

おれのいくじなし…。

おれがしょんぼり且つぼうつとたつてると隣のクラスの諏訪戒が声をかけてきた。

「モモ！なくにぼーっとつたってんの？？」

そういつて笑顔でおれの顔の前で手をひらひらさせる。

戒は学校でも目立つほう。

まず髪がオレンジっぽくて、騒がしくて愛想がよくて。

人気者タイプ。

自分で言うのもやなんだけど、おれはどっちかといえば、そういうクラスで目立つタイプなんかじゃなくて、おれの友だちも勿論そういうタイプじゃない。

戒をのぞいては。

戒はなんでかおれと仲良くしてくれてる。

入試の時にはじめてあったのがきっかけ。

その時戒は熱あつてすんごい苦しそうだった。

それを俺がたまたま持ってた薬あげて助けてあげたんだ。

それ以来ずっと戒はおれをみつけたら声をかけてくれる。

けど傍から見たらおれらはすごくでこぼこなわけで。

入学当初は話してるだけで先生が「どうしたの？」ってよってきた
っけ。

あの時戒は怒ってたけどおれは笑っちゃったんだ。

そしたらそんなおれをみて戒はにかつと笑った。

戒はすごく良い奴だと思う。

戒の明るいところはおれもすき。

でも今は気分下がってるから常にハイテンションな戒についていけない…。

「あれ??? どうしたの? 具合悪いとか???」

戒が心配そうに顔を覗き込んでくる。

「あ…うん。なんでもない…」

そうはいったもののその時のおれの顔は「なんでもない」ようには見えなかったんだと思う。

戒はおれの手を強引に引っ張った。

「え…？ ちょっ…戒！ どこいくの？」

そうきくおれを戒は振り返りみた。

「気晴らし。モモしよげてるからさ！」

そういっておれの手を掴みながら戒は走り出した。

スキってこと

「戒！ちよっ…気晴らしってなに？…どこいくの？…ってか早いよ！」

そうおれが言うのも聞いてくれない。

手はどんどん戒に引っ張られて先にいっちゃんし足はそれに自然についてく。

どうしようもできない。

すれ違う人はみんなおれらを見る。

一体何事？といったかんじに…。

走って走ってついたのは自然に囲まれた公園だった。

その時にはもうすでに息切れしておれも戒もすぐに芝生にへたりこんだ。

「つつ…疲れた…」

おれは芝生の上になっころがった。

「ほんと疲れた」

ははっと戒は笑っておれの横に寝転がった。

「疲れたって…戒がおれのこと引っ張ってここまで走ってきたんじゃない」

おれがはっと大きく息を吐くと戒はまたはっと笑った。

「まあねえ。だってモモ元気なかったから」

一瞬忘れてた鈴ちゃんのことを思い出した。

「うん…そうなんだー…」

おれがそういつて深いため息をつくとき戒は慌てたように「ごめん。なんかやなことでも思い出しちゃった？」とおれにきいた。

「うん。大丈夫」

おれはにこつと精一杯笑って見せた。

そうしたら戒は「よかった」とくだけた笑顔をおれにみせた。

それから話をはじめる。

「あゝあ！にしてもさっき俺らのこと皆みてたね！」

そういつて戒は起き上がった。

「そりゃみるよ。だって戒ものすごいスピードでおれのこと引っ張るんだもん。しかも戒派手だし」

戒のオレンジ色の髪は夕日にあたってますます輝いてる。

「ははっ！まるで俺がモモいじめてるみたいだったかな？まわりからみたら」

そういつて夕日を背ににこつと笑った。

「どうだろね。そうみえたかも。だっておれと戒は正反対なかんじだし。タイプだって違って見えるよ」

そうおれがいうと一瞬戒は寂しそうな顔をした。

「んゝ…タイプ違う…か。でもこーやってモモと仲良いのって正反對だからかもよ？」

そう戒はいつておれの目をみる。

戒の目はなんかおれの答えを本当に真剣に待ってるようにみえた。

「そうだね。正反対だからいいのかも」

そうおれがいうと戒はすごく嬉しそうな顔をした。

「そーだよね！」

この時おれは戒って良い奴だなーくらいにしか思ってた。なかった。

この時戒が嬉しそうにしてた意味だって理解できるわけなかった。

スキってこと

「そーいやなーんでモモはくっらーい顔してたわけ？」

戒が寝転んでるおれをちらっと上からみた。

おれは起き上がると戒をみないで前をみながらポツリポツリと話をした。

「んゝ…。大したことじゃないんだけどね。おれさゝ…」

そこまでいって一回言葉を続けるのをやめた。

戒にまず口止めしなきゃ。

「どうしたの？」

戒が不思議そうな顔でおれをみた。

「うん。あのね、戒。おれがこれから話すこと絶対誰にもいわない？」

戒の目をみてはなす。

戒はコクリと頷いて「わかった」と一言だけ言った。

「じゃあ話すね。おれ好きな子いんの」

そういったら戒は驚いた顔をした。

「モモ…好きな子いるの…？それって彼女？」

彼女といわれてなぜか不意に頬が赤くなってきた。

「かつ彼女じゃないけど…」

どもっちゃった…。

鈴ちゃんが彼女とか想像するだけで嬉しすぎ…。

「ふん。それ誰？」

なんか急に戒の口調が冷たくなった気がした。

どもっちゃったし引かれた？？

戒はモテるから…。

おれの気持ちなんか理解してくれないかも。

でもここまで話してやめるのもなんか微妙だから全部話すことにした。

「うん。鈴ちゃんって…えっと、森川鈴ってわかる？ B組の…」

戒をみると戒は少し考えてるようだった。

おれはA組。戒はF組。

鈴ちゃんとは結構クラス離れてる。

顔と名前が一致しないのかな？

「しってる。髪はセミロング。目はぱっちり。黒髪。そんで成績優秀。だろ？」

戒が一気に鈴ちゃんの特徴をあげてく。

それにおれはびっくりした。

だってなんか…結構詳しい。

「鈴ちゃんのこと…知ってるんだ」

戒をみると戒はにっこり笑った。

その笑顔は寂しそうな嬉しそうな複雑な笑顔。

そして一言「まあね」といった。

おれはその笑顔をみてなんだか不安になった。

なんでかわかんないけど戒をみて不安に思ったことははじめてだった。

鈴ちゃんの話はそこでおわった。

結局最後まで話さなかった。

そんな雰囲気じゃなくて。

少しの沈黙のあと戒は立ち上がりおれに手をのばした。

「帰ろっか」

そういっておれを掴んでたたせるとしばらくその手を離さなかった。

「戒…何？」

そうきくと戒は手を離れた。

「手ちっちゃー!!」

その戒の一言におれはむきになって「そんなことない」とずっとわめいてた。

その間鈴ちゃんのことを忘れられた。

別にふられたわけじゃないんだけど告白できなかったっていうのが情けなくて仕方なかったんだ。

いわゆる自己嫌悪ってやつ。

戒は結局途中寄り道をしながらも家まで送ってくれた。

おれ男だから別に送ってくんなくたっていいのに。

そういたら戒は「そお？モモふらふら〜と迷子になってそうだから」とからかうようにいって笑った。

そして大きく手をふり小走りに帰ってった。

おれは戒がみえなくなるまで見送った。

戒は途中何度か振り返ると大きくおれに手をふった。

戒のそういう人懐っこいというか…愛想の異常にいいところ羨ましい。

鈴ちゃんにはそういう奴のほうがあつてるのかもなんて思っちゃつて、それ考えてまた自己嫌悪に陥った。

すきってこと

朝目覚めると気分が落ちてた。

昨日は戒に引っ張りまわされて久しぶりに走ったせいかぐっすり寝れたんだけどな。

今日こそ鈴ちゃんに告白する！

…できるかな…。

問題はタイミングなんだ。

ってか友だちがいたって声かけらんないやだめだよな。

おれ情けない…。

よし！きめた！

今日は鈴ちゃんが友だちといっても声かける！！

そんでぜーったい告白するんだ！！

失敗したって…そりゃ嫌だけど寂しいけどでも…かまわないんだ。

伝えるってだけでなんか一歩前進できる気がする。

そんなわけ？おれは気合をいれて学校に向かう準備をした。

「いってきます」

そういつてドアを閉めると丁度隣からもドアを閉める音が聞こえた。

まさか…？

もしかして…！

心臓が馬鹿みたいにはねあがってる。

壊れたみたい。

目はずっと斜め前に釘付け。

何か恐ろしいものをみたみたいに。

そんで少し汗もかいてきて。

体は完全に硬直してる。

足音が聞こえる。

そしておれの視界に君は入る。

それは拒めないことで、嬉しいんだけどとても切ない気持ちになる
わけで、そんで…

おれの心臓はもう爆発寸前なんだ。

「あれ？おはよ」

可愛い声。

おれをみてる。

鈴ちゃんだ。

「お…おはよ」

おれは挨拶だけで精一杯になっちゃった。

「どうしたの？ なーんか元気ないじゃない。また誰かにいじめられた？」

鈴ちゃんがおれの顔を覗き込む。

「や…その…」

しどろもどろ視ながら気付いた。

「…鈴ちゃん何気に今馬鹿にしたでしょ。もういじめられてないよ！」

おれがそういつてふくれると鈴ちゃんは「ごめんごめん」と笑いながらおれの頭を少し背伸びしてぽんと叩いた。

それだけでおれはどれだけでもきどきしてんのか鈴ちゃんはわかってないんだろうな。

「昔はよく泣いてたよね。で、私が助けてあげるの」

そう鈴ちゃんは笑った。

でもおれは正直笑えなかった。

鈴ちゃんにかばってもらってたただなっただけで過去…あんまり良いもんじゃない。

「そうですねー…」

おれは少し暗めにそういった。

そんなおれを鈴ちゃんはみてないみたいでふーっと息をはくと静かに言った。

「私がないとリクは駄目ね」

その言葉に不覚にもどきつとしちゃうんだけど、どっちかといえばその台詞おれが鈴ちゃんにいいたかった。

「今はそんなことないよ」

そうおれが言うのと鈴ちゃんは少し寂しそうな顔をして「：確かにそうだね」といった。

なんでそんな顔するの？

それから少し沈黙が続いた。

スキってこと

二人並んでてく歩くとき昔を思い出した。

さつき鈴ちゃんが言っていたみたいによくいじめられて泣いてるおれを鈴ちゃんが家までおくってくれた。

あのおれはまだ鈴ちゃんより背も低くて…。

今よりへたれ。

でも今では少しは強くなったって思うよ。

そんなことを考えててやっと気付いた。

いまだ！

今告白すればいいんだ！

まだ家の近くで同じ学校の人も全然歩いてないし人もあんまない。

こんなに最高のシチュエーションないよ！（おれにとって）

「鈴ちゃん…」

声をかける。

鈴ちゃんは「何？」といっておれをみた。

どきどきする。

いや…どきどきしてもんじゃないバクンバクンする。

心臓やばい。

頬やばい。

今多分真っ赤。

鼻血だして倒れちゃいそうなほど熱い。

「あの…おれ」

あ~~~~~!!

どきどきしすぎて中々いえない!!

「?」

鈴ちゃんは少し上目遣い気味でおれをみてる。

それを見ますますおれの頬は熱くなる。

早く…早くいわなきゃ心臓もたない!

「鈴ちゃんが…鈴ちゃんがすきだよ!」

少し声がうわずった。

でもいえた!!

やっといえた!!

なんか少しすっきりした。

鈴ちゃんの顔をじっとみる。

どんな顔してるかみるのは怖かったけどこらえた。

「リク…本気？」

鈴ちゃんがゆっくりとおれと目線を合わせながらきいてくる。

「…うん…本気」

鈴ちゃんに見られておれの頬は一気に燃え上がった。

恥ずかしくて恥ずかしくて仕方ない。

沈黙が続く。

これはもうだめだと思って目をそらした途端鈴ちゃんは思いつきり
おれにだきついた！

「リク！！」

「すっ鈴ちゃん！？」

おれは何がなんだかわかんなくてただただ赤くなっていた。

「嬉しい！私もリクがすき！片思いかと思ってた！」

そういつて離れた鈴ちゃんはすっごく可愛くて抱きしめなおしたいくらいだった。

でも一応道の真ん中だし少しは人がいたからやめた。

おれはそんな鈴ちゃんになんて返事していいかわかんなくてしどろもどろしながら自分の気持ちを伝える。

「おれも片想いかと思ってた…。鈴ちゃんがおれのこと好きなんて…信じられない」

そういうと鈴ちゃんは照れ笑いしながら「信じてよ。私リクのこと小さい頃から好きだったんだから」といった。

おれは嬉しくて嬉しくて叫びたいくらい。

勿論我慢したけど。

こんなに上手くいくと思わなかった。

でもうまくいったのは初めだけだった。

どうして世の中ってうまいことばっかじゃないんだろう？

幸せなままいらればいいのに。

リピートできたらいいのに。

幸せな時だけを何度も何度もリピートするんだ。

永遠に…。

それがたとえ作られた幸せであってもおれはそれで満足なんだ。

スキってこと

学校につくまで鈴ちゃんと目があつては二人で笑ってた。

なんかすんごい幸せ。

学校に着いたらすぐに戒に報告しようっと。

別に報告しろとかいわれてないけど昨日心配してくれたし…。

でも教室前とかで言うのは恥ずかしいな。

屋上とかよびだしたら来てくれるかな？

昼購買にご飯買いにいくついでにいこうっと。

どこでいうかはそれから考えれば良いや。

「じゃありク、また帰りね！」

気がつけば学校についてた。

鈴ちゃんが僕に手振ってる。

「うん！また帰りに」

おれも手をふる。

今日帰りは鈴ちゃんとかえる。

なんか嬉しいな。

別に一緒に帰るの初めてってわけじゃないけど幼馴染と彼女じゃシチュエーションが全然違うよ。

なんかもう今日は一日中ニヤニヤしてるかも…。

もう本当幸せ！

「なあにニヤニヤしてんだあ？」

どかっと乱暴にあいてる前の席に座り込んできたのは友だちの最上蓮。

おれの友だち。

ってか幼馴染に近いかも。

昔よくおれをからかって鈴ちゃんに殴られてた。

いまだに鈴ちゃんと顔合わせたら喧嘩してる…。

「えへへ…」

おれが笑うと蓮は少し顔をひきつらせ「なんだよ？ 気持ちわりーな」といった。

「うん。あんね…。どうしょ。蓮には言わないどころかな」

そうおれがいうと蓮は「なんだよいえよ!」といっておれの方を掴みぐらぐら揺らしてきた。

ほんつと昔から乱暴だ。

「わかったわかった言うよ!! おれ昨日…耳かして」

そこまで言って気付いた。

ここ教室のと真ん中じゃん。

「耳?なんで?」

「ききたいんでしょう？早く」

そういうと蓮はしぶしぶおれに耳をだした。

「ほら」

早くしろといったように目で蓮が合図する。

コクリと頷きおれは話をはじめた。

「あんね。おれ昨日鈴ちゃんに告ったの」

そういうと蓮はでっかい声で叫びだした。

「ええっ！？ 鈴に！？ おまえが！？」

「声がでかい！」

耳打ちしてんのに意味ないじゃん。

「あ…悪い」

そういつてまた蓮は耳を差し出す。

「で、成功しちゃった」

そういうと蓮は「マジ!？」と叫んだ。

「なんだよ。お前おれに一言も相談しなかったじゃねーか」

すこし小声で蓮は話しながらおれを恨みがましくみる。

「だってさ、蓮鈴ちゃんと仲悪いじゃん。ろくなアドバイスしてく
んないと思って」

「ちえーっ。つまんねー。じゃあ鈴とのこと知ってるのおれだけ？
酒井とかには話した？」

酒井とかはおれがいつも一緒にいるクラスの友達。

「話してないよ。でも戒にはすきだってことは話した」

そういうと蓮ははっとした顔をした。

「ああ。アイツね！　そういや仲いいんだっけ？　なんか意外だよな」

そういつて蓮がわらった。

「よくいわれる」

そういつておれが笑うと蓮は「だってぱっとみいじめっこといじめられっこみたいだもん」といった。

なんか腹立つな〜。

少しムカついたから意地悪いつてやった。

「でも蓮より全然乱暴じゃないよ」

そういうと蓮は「なんだと？俺は常に優しい」といって俺の頭を軽く叩いた。

それも乱暴だと思う。

「ってかさーうまくいったんだから隠さなくても良くね？」

当たり前でいて中々おれにとっては難しい質問を蓮はしてきた。

「普通はそうかもしれないけどさあ相手は鈴ちゃんだよ?…つまりあわない」

自分で言っただけ落ち込んだ。

そうなんだよね。

相手は鈴ちゃん。

なんでおれと付き合ってくれたのかもわからない。

「なるほど!でもお前だってよく可愛いって女子とかにいわれてんじゃない」

フォローのつもりらしい。

「可愛いっていわれても嬉しくない…。かつこいいが良いいよ」

そういつて溜め息をつくおれをみて蓮は笑いながらいった。

「それは無理だ」

スキppingこと

昼になってチャイムが教室に響き渡る。

みんな待ちわびたように席をたち弁当を広げたり席を移動したり。

蓮がおれにむかって声をかけてきた。

「お前今日弁当？」

「うん。購入」

そういうと蓮は「俺も行く」といった。

でもそれは今日は困る。

戒に用があるから。

「ごめん。おれ戒のどこ行ってくるから先いつてて？」

そういうと蓮はすべて理解したような顔をした。

「ああ。OK。頑張れよ！」

そういつておれの肩を叩くと教室からでていった。

おれも教室をでて戒のそこへ急ぐ。

どっかいかれちゃったら困るから。

F組の教室を覗き込むと戒はいた。

「戒！」

戒はすぐこっちをむいた。

そして笑っておれのところにくる。

「モモ！」

名字からとって「モモ」ってよぶのは戒くらいだから一瞬変な感じがする…。

「うん。あんね、話あるんだけどいい？」

そういうと戒は「いいよ」といって教室からでておれの横にたった。

購買によって昼ごはん買って、おれはあんま人のいないところに入った。

きよろきよろしてるおれをみて戒が不思議そうな顔をする。

「な〜にキョロキョロしてんの？モモ」

ひよこつとおれの前に顔をだしてくる戒は少し幼く見えた。

「ん」と…あんま人のいないところ行きたいかな…なんて…」

えへへとごまかして笑うと戒は少し何か考えたような顔をした。

それから急に笑顔になって玄関のほうを指差す。

「じゃあ外行っちゃう？」

「え〜〜〜〜？：？：？」

当然うちの学校はそんな昼休み中に外でたら怒られるわけで、戒は絶対授業をサボる気だってこともわかってた。（少なくとも5時間目は）

そんなわけでおれは迷ったけどどうせ5時間目の授業もろくにきいてられるわけなかった。

鈴ちゃんのことをきつと頭から離れない。

「な？ いこーよ！ 大丈夫だって♪ぜーったいみつかりっこないよ」

戒が「ね？」といっておれをみる。

「でも…見つかったらやばくない？」

そういつてチラッと戒をみると戒はなんの心配もないといったように笑ってた。

「大丈夫だって！みつかったら俺の所為にすりゃいいじゃん！」

戒はそんなこともあっけらかんという。

おれが人の所為になんかできないの知ってるくせに…。

「えー…？そんなの…。えゝ…？」

それでも渋るおれをみて戒は少しイライラしたのか「別に良いけど

さ』といって玄関のほうから引き返してくる。

それを見てなぜか決意がわく。

「まってまって！いくよ。外」

そういうと戒はにっこり笑ってこう言った。

「そうこなくっちゃ！」

玄関から門をでるまでは本当に生きた心地がしなかった。

いつ後ろから先生が追っかけてくるかってすんごい心配になった。

何度か振り返ったら戒が「振り返ってないで早く突破しちゃおう」といっておれの腕を引っ張ってくもんだからおれは引きずられるようにして学校をでる羽目になった。

大丈夫。

サボるっていったってちゃんと6時間目には戻ってくる。

その間どこにいったかきかれれば、腹が痛くてトイレにいつてましたとか言えば良い。

そんなことを考えながら戒についていく。

戒は時々後ろを振り返っておれを確認すると笑顔をみせた。

着いたところは昨日の公園。

小さい子がちらほら家に帰ってく。

もうお昼だ。

戒はこどもがいなくなってすぐにブランコをとった。

「モモ！ここで飯食おうよ」

そういつてブランコをキイキイ揺らす。

なんか小学生みたい。

そういおうかと思ったけど怒られそうだからやめた。

ブランコに座るとなんだか子どもの頃に比べてブランコが低くなつたように感じた。

背…伸びたんだな。

隣では戒がものすごい高さでブランコをこいでいた。

スキってこと

「久しぶりにブランコこいだ〜！すんげえ気持ちいい♪」

戒は笑顔でブランコこいでる。

そんな戒をみて自由だなって思った。

そんでいつも自信満々な戒。

本当おれとは正反対。

「あゝあ。なんか戒が羨ましい」

口にだす気はなかったけどついだしてしまった。

いってからちよつと後悔。

なんか恥ずかしい。

「いきなりどーしたの？」

戒が地面に足をついてブランコをとめる。

「んゝ自由に自信満々でさ。おれには真似できない」

そうって少し恨めし気に戒をみると戒は少し嬉しそうだった。

「俺のそういうところが好きってこと？ モモは」

戒がそうきいてきたのに対しておれは少しびっくりした。

ストレートすぎる。

すきってなんか…言い方が本当ストレート。

戒がモテる一因でもあるんだろうけど。

「うん…まあ羨ましい」

すきっていうのも気持ち悪いと思ったから羨ましいにしたい。

「ふーん…ありがと♪俺もモモの努力家なところ好きだね」

そういつてにこっと笑う戒におれは恥ずかしくなる。

「戒ってストレート…」

そうぼそつといったおれの言葉は戒には届かなかったらしく戒は口笛を吹きながらまたブランコをこぎはじめた。

「で、俺になんか用あったの？モモちゃんは〜♪」

戒はかなりごきげんだったみたいでご飯も食べないでブランコをこぎ続けている。

まあ学校をぬけだすなんてスリル満点で楽しいことそうないわけだけど。

なんかこんなに機嫌良い戒に鈴ちゃんのことを話して良いのか迷った。

昨日反応微妙だったからな…。

でもなんか相談したんだから結果言ったほうがいいのかなって思うし。

ちらっと戒をみると戒はブランコをとめておれのほうに身を乗り出してきた。

「なにになに？真剣な話？」

そういう戒の目にはなんか光がみえた。

期待してるような目。

でも何を？

「うん…。あのさ、昨日の話の続きなんだけどね」

そう言うとき戒は一瞬考えてから顔を曇らせた。

「ああ。愛しの鈴ちゃんのね」

そう少しいやみっぽく言うときまたブランコを漕ぎ出す。

今思った。

まさか戒は鈴ちゃんがすき？

「戒って鈴ちゃんがすきななの？」

おそろおそろきいてみると戒は即答した。

「まさか」

しかも驚いたような顔で。

「そっか」

そういつて笑顔になるおれ。

戒はそんなおれをみてますますブランコの速度をあげた。

「戒、話きいてくれるの？」

そうおれがきいても戒は答えてくれない。

なんで？

おれなんか言っただけ？

「あ、戒って鈴ちゃん嫌い？」

もう思い当たることあったらこれしかない。

その質問には答えてくれた。

「嫌い」

なんかショックだった。

戒ってあんま人嫌いにならないと思ってた。

戒に嫌いな人がいるなんて。

それもおれの好きな鈴ちゃん。

「鈴ちゃんと話したことあるの？」

そうきくとブランコをこぎながらあっけらかんと答える。

「ないよ」

ないならなんで？

戒わけわかんない。

「じゃあなんでさ？」

そうきくと戒はいきなりブランコから飛び降りた。

「∴絶対に俺が望んだって手に入らないもの、らくらく手に入れたから」

そういつて戒は仏頂面でおれをみる。

「…なにそれ？わけわかんないよ…」

おれがそういつて戒をみると戒は少し困ったような顔をした。

それから「なんてね♪」といってにひっと笑った。

ますますわけわかんない。

「戒…変だ」

そういうと戒は悟ったみたいに頷いた。

「うん…。変なんだよ。俺。ありえねーんだ。モモそれ知ったらもう二度と俺とは関わってくんないってくらい俺変なの。でもモモは優しいから友達でいてくれるかもね」

そういつて急にうつ病にでもなったかのようにしよげる。

戒は空をみてた。

「…変だよ。元氣ない戒なんて。変」

そういうと戒はこっちもむかずに話し始めた。

「俺にだって元気でいられないくらいショックなことがあるんだよ。モモ」

なんか怒られてる気分だった。

「どうしたの？」

そうきくと戒はただ静かに首を振った。

「なんでもないんだよ。ちょっと考え事」

戒はそう言って伸びをすると「昼飯たべよ!」といってやっところちを向いた。

スキってこと

昼ごはんを食べてる間はおれも戒もずっと黙ってた。

ただ黙々とパンをかさかさあける音や食べる時の音が聞こえるだけ。

それから風の音。

草がさわさわ揺れてすごく平和を感じた。

ご飯も食べおわるとなんだか眠くなってきた。

気温今日あったかいし。

ぽかぽかしてる。

おれがあくびすると戒はにこつと笑った。

そんでベンチのほうを指すと「あっちいこ」といった。

ブランコよりベンチのほうが断然楽だった。

よしかかれるし。

「あゝ…眠くなってきた」

そうおれが言うとき戒は「ねたら？」っていった。

そういわれても…。

「ねたら？って…。ねれないよ。こんなところじゃ。それに学校もどんなきゃ」

「心配性だなく。6時間目までにもどりゃいいよ」

そういつて戒はあくびしてのびをした。

ま…予想してたけど。

授業サボるって事くらい。

横をみると戒は腕組をして寝てた。

おれ一人じゃん。

そんなふうに思いながら公園を見渡す。

ブランコは風にゆれてこどもはお昼でだれもない。

まさに無人。

草はゆれてるしシーンとしてる。

気持ち良い。

あゝ…眠くなってきた。

いつも授業中5時間目って絶対ねちゃうんだよね。

あゝ…もお駄目…。

瞼がとろんとして目を開けようって頑張っても頑張っても閉じてくる。

そして真っ暗。

夢の中…。

やがてリクは深い眠りについていった。

寝てたと思ってた戒が起きてたなんてしらずに…。

「モーモ。モモ〜？」

そういいながら戒はリクの前に手をひらひらさせる。

「…ねちゃったんだあ」

そういつて優しく笑う。

「あゝあ。モモは知らないよな〜。俺がどんな気持ちなんかなんて

さー」

そういつてわしゃわしゃとリクの頭を乱暴に、それでいて優しく撫でた。

そうしたらリクが笑った。

にこっと。

それを見て戒は少し赤くなる。

「可愛い顔しちゃってさ……。どーせ愛しの鈴ちゃんのことでもおもってんだろ」

そうぽそつといってぽんっと軽くリクの頭を叩いてやった。

切なすぎた。

色々な疑問が頭の中を交差している。

最終的に戒はリクの寝顔をみながら強く強くただ一つのことだけを考えた。

なんでこいつなんだろう？

「んー…」

とろんと目を開けると外は少し寒かった。

だけど不思議と肩から下はまだあったかい。

ぱっちり目をあけてみるとそこには自分のものではない学ランがかかっていた。

隣をみると戒は学ランの上をきていなかった。

そして空を見てもう夕方なことに気付く。

起きたおれを公園に再び集まり今帰ろうとしてることもその母親達がみてた。

言いたいことはわかる。

サボり？

ってこと。

でもそんな目に構ってる暇はなかった。

戒を起こさなきゃ！

戒はねてる。

「戒！戒！おきて！」

ゆさぶると戒はとろん（というよりもどろんとした状態）と目をあけてまじまじとおれをみた。

「なんか…すっげーいいかも…このシチュエーション…」

そういつてにへらと笑った戒はまた眠りについた。

わけがわからない。

完全に寝ぼけてる。

「かーーーーーいーーーー!!!!」

耳元で叫んでやった。

「わっ!？」

といって戒が飛び上がるようにして起きた。

「なになに!?!？」

きよろきよろとあたりを見渡す戒はなんだか滑稽だった。

そしておれにきづいた。

「あ、俺ねてた？」

そういった戒の顔は気まずそうな笑顔だった。

そんな戒に学ランを頭からかけてやる。

「!？」

戒は慌てて学ランを頭からはずした。

不意打ちだったからかなり驚いたみたいだ。

「ありがとう」

おれがそうお礼をいうと戒は満足そうに微笑んだ。

そこからはゆっくりしていられなかった。

とにかく走んなきゃ！

鈴ちゃんのところまで。

スキってこと

「あゝ…どうしよう。もう鈴ちゃん帰ってるかな？」

学校への道を走りながらおれは戒にきいてみた。

不安で不安で仕方ない。

もう5時。

部活やってない子は大体帰っちゃってる。

まさか寝てて6時間目もサボっちゃうなんて！

「帰ったんじゃない？ いいじゃんもう。ゲーセンでもいこーよ」

そういつて戒はめんどくさそうにおれの後をついてくる。

…戒にきいたおれが馬鹿だった。

戒はよくわかんないけど、おれと鈴ちゃんのことを歓迎してはいないみたい。

鈴ちゃんが嫌らしい。

わっかんないな。

「走るの疲れた。ゆっくりいこうよ」

そう戒はいつておれを止めようとする。

仕方ないからおれは一回止まって戒にまずお礼をいった。

「戒、今日はありがとう。でも今すっごく急いであるから先行くね！」

そういつて走り出したおれの後を戒はついてきた。

「わかったよ。俺もいく。外連れ出したの俺だし。モモの愛しの鈴ちゃんと一緒に謝ってあげる」

戒は鈴ちゃんのことを「モモの愛しの鈴ちゃん」っていう。

それはいやみなんだろうことは鈍いおれでも薄々感じてる。

だから「ありがとう」っていったときのおれの言い方は少しいやみっぽかったかもしれない。

言った後で心配になって戒をちらっとみると戒は「ほら、急ぐんだろ？よそみすんな」といって前をみてさらにスピードをあげた。

学校の門が見えたとラストスパート。

思いつきり走る走る走る。

目指すは教室。

鈴ちゃん待っててくれてるのかな？

きっと待っててくれる…。

鈴ちゃんはそういう子だ。

昔おれがどんなに学校遅刻しそうになっても待っててくれた。

中学生になってからはさすがに一緒に行かなくなったけど。

急いで階段を駆け上って右に曲がる。

気持ちだけが先へ行く。

早く鈴ちゃんに会いたい。

ガラッ！！！！！

思いつきり教室のドアをあけたものだからバンッって音が教室中に響いた。

中には誰もいなかった。

「…」

絶句した後大きなため息をついておれはその場にしゃがみこんだ。

汗だくだく。

「いないな」

戒がポツリと言った。

おれを哀れんでるような声で。

「うん…」

おれはそれしか言えなかった。

「ケータイに連絡きてないの？」

戒がそうおれにきいた。

携帯！！！！

忘れてた！！

おれは返事すより先に慌てて携帯をみようとする自分の席にかけっぱなしになってるかばんの中をあさった。

ストラップを引っ張って携帯をだす。

ぱかっと開いたら新着メールがあった。

それを見た途端おれの心臓は高鳴った。

鈴ちゃんから？

案の定鈴ちゃんから。

でもおれはそれを見た途端また脱力してしまった。

【今日私臨時委員会入っちゃって結構遅くまでかかりそうだから先に帰ってていいよ；ごめんね（＞△＜；）リクと一緒に帰りたいかったよ；；；】

メールにはそうかかれていた。

「ははっ…」

おれは自虐的な笑いを浮かべた。

「どーしたの？」

戒がのぞきこんでくる。

「これ」

そういつておれは携帯を戒に渡した。

戒はそれをまじまじと見た後苦笑した。

「モモ頑張ったのにね」

「うん…戒もね。ホントありがと」

そういつて二人で笑い出すと止まらなくなつて…しばらく笑いは止まらなかった。

スキってこと

【待ってるよ】

そう鈴ちゃんにメールを送った。

戒には「帰って良いよ」っていったけど「モモ暇だろ」っていった一緒に残ってくれた。

その間はなしたことっていえば他愛ない話。

それぞれのクラスとか授業の話、昔の話。

鈴ちゃんの話は一回もでなかった。

戒が笑って体が揺れるたびにオレンジ色の髪が夕日にあたってきら輝いた。

「戒の髪すっげー光ってる」

そういうと戒は自分の髪を掴んでまじまじとみた。

「そう？」

「そうだよ」

そして次はおれの髪をみる。

「モモは…染めてないよね？」

「うん。地毛」

おれの髪は茶色い。

でもそれは生まれつきであって染めたわけじゃない。

「色素薄いよね」

そういつて戒はおれの髪を眺めた。

「うん。よくいわれる」

そのまま奇妙な沈黙が続いた。

戒はただおれの髪をみておれは戒をみる。

変な感じ。

その時教室のドアが開いた。

ガラッ。

「リク」

そう優しくおれの名前を呼ぶ鈴ちゃん。

「鈴ちゃん」

おれは一気に笑顔になった。

けど鈴ちゃんは戒を怪訝な顔でみる。

「友だち？」

それはおれに聞いたんだろうケド顔は戒を凝視していた。

「うん諏訪戒って言うんだ」

そうおれが言うのと鈴ちゃんは安堵したような笑顔になった。

「そうなの」

「そんじゃ俺帰る」

戒ががたつと椅子から立った。

そしてそのまま無言で教室をでていこうとする。

おれは慌てて戒の学ランの裾を掴んだ。

「戒！」

戒はきよとんとした。

「今日ありがとうね」

何回も言うのもしつこいかなと思ったけどもう一度いいなかった。

戒はにこっと笑うと「お安い御用ですよ」といって笑った。

それから手をひらひらさせて玄関の方へ歩いていった。

「なんか…意外だね。リク諏訪君と仲良いつて。そういえばたま

と一緒にいるとこみるけど」

そういいながら鈴ちゃんは戒が行った方をみてる。

「うん…。意外ってよくいわれる」

「いじめっこといじめられっこみたいだもんね」

そういつて鈴ちゃんはふふっと笑った。

「ひどいな。鈴ちゃんのおれのイメージいつまでも
いじめられっこなんだもん」

そういつてむくれると鈴ちゃんは背伸びしておれの頭を撫でた。

「ごめんね」

それだけでおれは真っ赤になって何も言えなくなってしまった。

そんなおれをみて鈴ちゃんは微笑むと「帰ろっか」といって教室のドアをさした。

スキってこと

帰り道おれと鈴ちゃんは手をつないだ。

校門をでたところで鈴ちゃんが手を差し出してきたんだ。

…おれからさしだしたかったんだけどさ。

そして今も手を繋いだまま歩いてる。

「あゝあ。今日疲れちゃった」

鈴ちゃんがそういうとおれと手を繋いだままぶんぶん手をふった。

「委員会？」

そうきくと鈴ちゃんは頷いた。

「そ。1時間くらい話し合ってたの。美化委員って大変。リクはずっと諏訪君といたの？」

そうきかれておれは今日会ったことを全部話すことにした。

「うん。実はさ、今日昼休みから学校サボってたんだよね」

そういうと鈴ちゃんはすごく驚いた。

「サボったって…リクが!？」

鈴ちゃんがおどろいたのがなんだか少し嬉しかった。

いつも驚くのはおれの方だから。

「うん。戒に話があつて。鈴ちゃんとおれのこと言おうと思つてさ」

そういうと鈴ちゃんは少し怪訝な顔をした。

「諏訪君…? 諏訪君って結構学校サボるの？」

鈴ちゃんは明らかに戒に悪いイメージを持っている。

「うん。いつもじゃないよ。今日はたまたま…。おれも戒も5時間目だけサボる予定だったんだけど寝ちゃってさ…」

そういつてへへっとおれは笑ったけど鈴ちゃんはあまり笑わなかった。

「なんか心配。諏訪君に誘われてサボったの？」

鈴ちゃんは明らかにそして確実に戒を敵視してきてる。

「うん…。そうだけど最終的に決めたのはおれなんだ。戒は学校戻ろうか？っていったけどおれがサボるっていったの」

なんか：母さんと息子の会話みたいだなーって思った。

「ふうん」

そういつて鈴ちゃんはあまりよく思っていないような顔をした。

そして次にはその心を言葉に出した。

「なんか諏訪君はリクに悪影響なんじゃないかって思っちゃう」

それにはちよつとおれもムカってきた。

昔から鈴ちゃんは結構偏見が多い。

そういうところは苦手。

…そういうところ含めて好きなんだけど。

「そんなことないよ。だって戒頭良いし」

そういうと鈴ちゃんは「知ってる」といった。

そしてそのまま沈黙が続いて気がつけば家の前だった。

気まずさは家の前まで続いた。

「…じゃあね」

おれがそういつて背をむけると鈴ちゃんはおれの学ランの裾を引っ張った。

「リク」

それから背伸びするとおれにキスした！

一瞬のことで何がなんだかわかんなくてもそうしたってことは理解できておれは真っ赤になった。

そんなおれをみて鈴ちゃんは微笑むと「おやすみ」といって家へ帰っていった。

おれは頷くだけであとは言葉も返せなかった。

しばらく鈴ちゃんの行ったほうを見つめてた。

やっと感覚が戻ったときおれの顔はにやけてた。

家に入って部屋に向かうと真っ先にベッドにとびこむ。

それから一人でくすくす笑ってその笑いはしばらくとまんなかった。

気持ち悪いっておもうよね？

でもとまんなかった。

自分でも気持ち悪いって覆ったけどとまんなかったんだ。

それから鈴ちゃんに会いたくなった。

ケータイでメールをうつ。

返事を待つ間そわそわする。

返事が来る。

嬉しくなる。

そして次に返事を今か今かと待つ…。

おれの世界は鈴ちゃん中心で回っていた。

この時まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7937b/>

MADLOVE

2011年1月25日15時38分発行